

大野郡朝地町草木岩陰遺跡

縄文時代後期土壇墓の新例――

鈴木重治
鳥養孝好

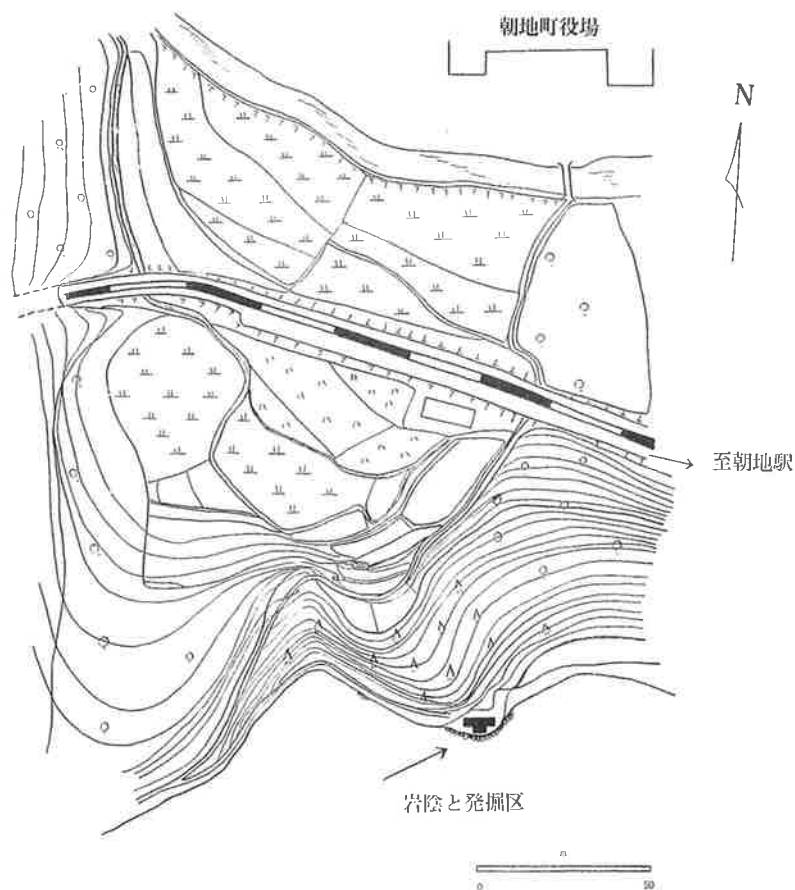
はじめに

豊肥緑朝地駅の南西約二〇〇米に位置する草木岩陰遺跡の調査は、昭和三十八年度の日本考古学協会洞穴調査特別委員会の一調査として別項稲荷岩陰遺跡の調査に並行して実施された。当調査は主として縄文時代後期の屈葬人骨を内蔵した土壇墓に注がれ、西日本に於ける抜歯例の好資料をもたらした。以下調査結果について概報する。

一、岩陰の立地及びその状態

阿蘇の火山活動によつてその噴出物が厚く堆積されている大分県西部地方は、すこぶる溶岩台地の発達がめざましい。この台地を縫つて深い谷が走り、更に各所に小谷をも形成している。大野川の一支流を控える当遺跡附近では、小河川の合流をみて谷に面して段丘上に多くの民家が営まれている。遺跡はほぼ西から東に開析された小谷の南側急斜面の中位に存在し、最短距離の川底からの比高は二十八米に及んでいる。(図一)

さて、岩陰は凝灰岩から成つており、間口二十二米、奥行きはテラスの端線まで六米が測れる。中央部での高さは奥壁で二



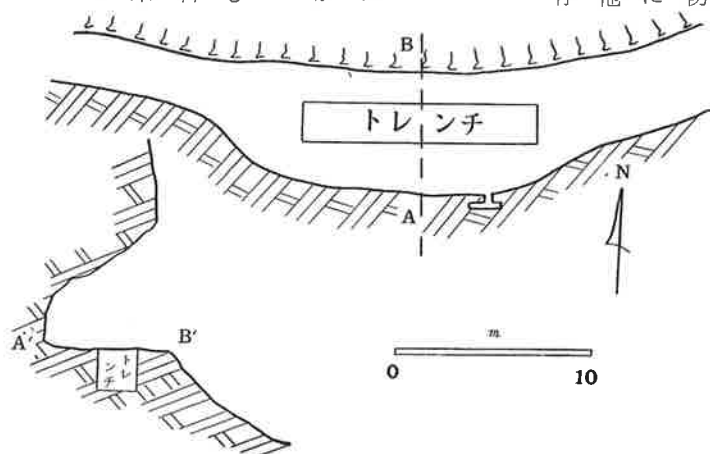
第一図 草木洞穴附近地形図

米近いが内弯しつつ上昇しており、尖端部で六米に至り垂直に近い岩壁にと続いている。平面形をみると、テラスを含めて内反りのゆるやかなカーブを画く。この岩陰の形成は古く河川の蛇行によつてなされたものであり、岩陰内部に推積されている数層の厚い砂層によつて明白である。したがつて当初直立していたと思われる凝灰岩の壁が大きくえぐられて半洞穴状の岩陰部を形成したことになる。岩陰の開口している主軸の方位は、やや西にかたよるが、ほぼ真北に近い。東から南、更に西方にかけて起伏の多い台地を背おっていることもあつて、日射に恵まれない部位に位置することを示す。したがつてこの方位は岩陰遺跡の性格に必要な条件を与えているかのである。附近に水量の豊かな湧水を持つとは云へ岩陰内部に日光の当たらないという条件

は遺跡を理解する上で見逃せない。八月下旬という調査期間中でさえ、現に我々は日没に近い二、三十分間、おい繁る木の間よりもれる日光を楽しんだにすぎなかつた。それだけに日中附近を踏査して、当岩陰遺跡に足を入れた際など急に冷気が体をつつみ、一時のいこいを与えてくれたものであつた。なお、奥壁の一部には第二次大戦中の（図2）防空壕が作られており、入口が狭く中に入つて左右に拡がりをもち、近時物置に利用されている。また防空壕入口に近く壁を活用した窯が二ヶ所埋没して存在するが、附近住人の記憶にないものではあつても、近代に入つて以後の所作であろうと考えられた。その他には壁にみられる加工の痕跡はなく、出土の遺物と関連して考えられるものは存在しなかつた。遺跡は以上のような立地と状態のもとに存在した。

二、出土状況と包含層

発掘調査は主としてテラスの中央部に設けた巾二米、長さ十二米のトレンチに於いて実施した。この発掘区域は当岩陰遺跡の主要な部分を占めているにもかかわらず、出土遺物の量において、我々が今迄経験したことのない程貧弱であり、わずかばかりの土器片と、二、三の石鏃、及び人骨を主とした自然遺物を確認したにすぎなかつた。したがつて、主要な遺物である人骨を除いて採集し得た資料は、地表から基盤までに推積している各層の土や砂のサンプルが多いという始末であつた。しかし我々の調査は最大の好運にめぐまれた。岩陰や洞穴遺跡特有の落盤層や重なり合う砂層など、良好な層序のもとで出土した少量の文化遺物は、時期や型式の明らかな資料であるばかりか、層位を確実に提示してくれた。この



第二図 岩陰実測図と調査トレンチ

ことはまた後述する保存良好な人骨を内包する土壙墓の営まれた時期を示す結果を生んだ。

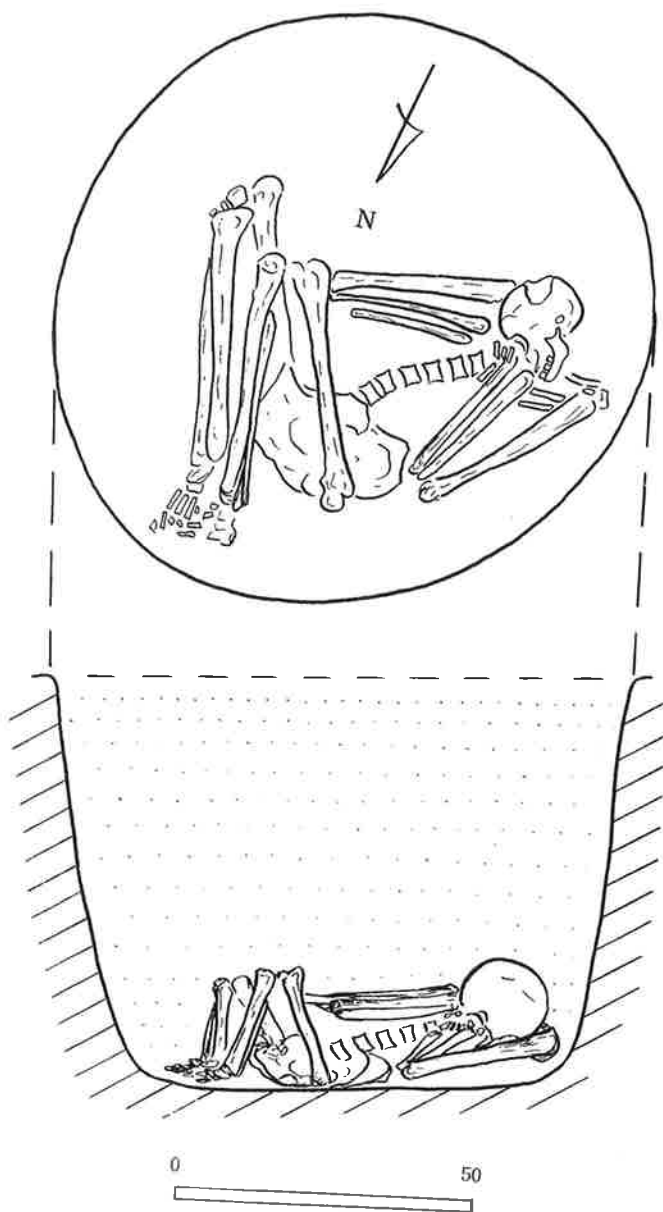
トレンチ内に於ける地層の重なりは、地表を含めた乱れた層（第一層）黒色混土砂層（第二層）、褐色混土砂層（第三層）、暗褐色砂層（第四層）、黒色砂層（第五層）と続き岩盤（第六層）に至っている。各層のうち特に注意すべきは、第三層であつてレンズ状に狭まれた二、三の灰層や、中位にみられた落盤の層を持つていた。数少ない遺物は、この第三層中に限つて出土し、特に落盤の下部に頭者であり、なお第四層中にも数片の土器片が出土しているが、生活面が考えられず、包含層とさえ指摘し難い状態である。

これ以外の各層からは、ついに遺物の出土をみなかった。このような状況の中にあつて、土壙墓は第三層中の下部に上面を開き、第五層の中位に底面を持つていた、完掘した当土壙墓の他、トレンチの西端にかかつて存在した土壙墓は、調査を後日に残したが、上面を第三層の下部に持つことからほぼ同時期の埋葬が想定された。

三、土 壙 墓

層位を重視して進められた作業中、第三層の中央部に存在する落石群の下部に直経約一米に近いピット状の上面を確認した。まずピット中に人骨の頭部が見出された。土壙墓と認め、上面の拡がりやその形状、更に同時に埋葬されたと考えられる遺物に注意した。その結果、土壙は長径九十五糧、短径九十糧のほぼ円に近いプランを持ち、中央部での深さ八十糧が計測された土壙中に埋没していた土砂は、第四層及び第五層として捌えた砂層の混在したものであり、ここに二点の土器片が出土した。この土器片は、土壙の上面と同位の文化層から出土した土器片と同一型式のものであり、他のものを含まなかった。このことは土壙の時期を決定する上で、土壙の真上に位置する土層の状態とともに好資料を提示した。すなわち土壙上部の土層は、トレンチ内の他の地点と同様に、層序が明確であり、層の乱れがなく、埋葬時に於ける地表面を十分に想定し得た。副葬品は存在しなかったが頭骨周囲の砂に黒味を帯びた紅色が認められ、朱、またはベニガラの使用が考えられた。

さて、埋葬人骨は細部の骨をも残す程良好な保存状態で屈葬位を示して出土した。顎を縮めて、右側に片寄りながら胸元にたれた状態の頭骨の左側に左肩甲骨や鎖骨が出土した。続いて肱を強く曲げた状態で左上腕骨と撓骨、尺骨が並ぶが、指骨は上部胸骨上に集合している。すなわち、肱を曲げ、手首を胸元に寄せた状態である。中央にみられる背柱は寛骨に寄つてゆるやかにカーブし、右側に傾く寛骨へと続く。この寛骨の上部を横切つて左大腿骨が延びている。胫骨と腓骨はほぼ平行するが



第三図 土壌と人骨屈葬状態実測図

一部が再び寛骨上に重なる程膝を強く曲げた状態である。体全体を右側にひねつた状態にある為、右側の上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨、腓骨は部分的にのぞきみられるほどである。特に下支骨は左のそれによつて大部分がおおわれている。以上の状態から、埋葬時に於ける様相は充分窺えるのであつて特に印象づけられるのは、四支骨を膝の部分で強く折り曲げ、両手を胸元に寄せ、あたかも合掌しているかの状態を示す点である。ここに土壙中に於ける典型的な屈葬人骨をみた。(図三)

なお、当屈葬人骨が先史時代人骨として人類学上にも多くの資料を提示しようが、それには後日の専門的な考察を待つとして、抜歯についてのみに触れておこう。年令は熟年とみられ、一般には成人骨として扱え得るものである。性別はあきらかに女性である。ここに注意すべきは抜歯であつて、上顎左右の犬歯と下顎左右の第一門歯が意識的に抜かれた状態にある点である。位置が左右対称にあるばかりでなく、抜歯の時期がかなり年令的に若く、後歯捻転の状態を充分に観察出来る。

四、出土の遺物と年代

すでに触れた通り、出土遺物の主要なものは土壙墓中の人骨であるが、この他文化遺物としての土器、石器、及び自然遺物の貝殻獣骨、木炭片等が若干見出された。これらのうち土壙墓の年代を含めて、遺跡の時期を想定するのに、型式のあきらかな土器が最も適していることは多言を要しない。出土の土器は第三層の下部から括つて出土した磨消縄文系の西平式、及び第四層中に見出された細片の撚系文及び縄文を有する時期、型式不明の土器である。従つて第三層は縄文時代後期中葉の文化層とみられるが第四層以下の時期については明らかにし得ない。土壙墓については土壙中にみられた土器や、上面に接して出土した土器が西平式である点から、第三層の文化層と同時期のものとして理解されるのであつて、縄文時代後期中葉の時期が、考えられる。石器は石鏃が数点出土したのみである。自然遺物では淡水産のカワニナや陸産のマイマイなどが若干見出された他鹿の骨が少量と木炭片がわずかに採集されている。これらはすべて第三層中からの出土であつて、第四層以下からは見出されていない。以上の出土遺物を通じて、当岩陰の先史時代遺跡としての主要な年代は、縄文時代後期中葉に一つの時点が求めら

れる。

むすび

調査結果を総括すれば、次の通りになる。

一、当草木岩陰遺跡は、方位も関連して四季を通じ、日光にめぐまれない方位に開口していることもあつて、生活址としては常時の使用にたえない状態にあつたと考えられる。

二、遺跡の性格を示す資料として土壙墓の意義は大きく、岩陰墓地とみられる。

三、土壙墓中に確認された人骨は、屈葬位で埋葬されており、保存度も良好な上、上顎左右に犬歯、及び下顎左右の第一門歯が抜除された女性人骨であつた。

四、数少ない出土品ではあつたが、西平式に属する一群の土器があつて、縄文時代後期中葉の遺跡と確認された。

五、西日本に於ける縄文時代後期の典型的な抜歯例をもつ屈葬人骨を土壙墓中に確認したが、人骨については人類学上の考察が待たれる。

(この研究は文部省科学研究により、日本考古学協会と朝地町共同調査で朝地町より研究費の一部を得た)